
夏の風になびかれて

ピヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の風になびかれて

【Nコード】

N2134B

【作者名】

ピヨ

【あらすじ】

バスケットに悔いのある和孝だが、バスケットをやろうとしない。しかし、ある一人の友の死をきっかけに再びバスケットを始める和孝。友の死を背に全国大会を目指す青春ストーリー！

始まり。(前書き)

この小説でなにか心に残ればいいです！

始まり。

「だりーなー！」

俺の名前は、肥後和孝。ここ、K西高校に入学した俺。

今日は高校生活初日。

めんどくせー。帰りてー。なーんて思っ歩いてると、後ろから肩を叩かれた。

「早く体育館行くべ！」

声を掛けてきたのは、俺と同じS中学の拳梧。

「おう。」

拳梧に無理矢理手を引っ張られながら体育館へ向かう。

バスケ

体育館には、たくさんの先輩やら、先公がいる。

「なあ、この高校は可愛い子いるかなー？」

拳梧はさっそく女探しか。

まったくこいつは全然かわってねーな。昔から女ったらしだ。

「お前、たらしなんがばれたら、女なんか作れねーぞ！」

「大丈夫！」

なんてコトをはなしながら床に座る。

すると、拳梧がこんなコトを言ってきた。

「お前、部活入るんか？」

部活。

考えてもいなかった。

「俺はちなみにバスケ！やっぱ諦めらんねーし！！」

バスケ……。

二度と聞きたくなかったことば。

「お前は？バスケやんねーの？」

「やんない。ははっ。もうやめたんだ。」

「なんで！一緒にやろーぜ！お前だつてくやし……」

「おい！うるさいぞ！静かにしろ！」

「すいませーん。」

教室へ戻ると拳梧が興奮ぎみに話し掛けてきた。

「悔しくねーのかよ！？」

「別にくやしくねー」

ホントは悔しい。バスケだつてやりたい！でも。

「はっ！？じゃあ、あいつと、拓磨との約束は嘘だったんか？ああ？」

拓磨……

拓磨とは俺と同じ中学で一緒にバスケをしていた。仲間だ。バスケ

センスは抜群！頭もいいし、おまけにイケ面。

俺は拓磨とこんな約束をかわしていた。

「なあ、和。お前どこ校行くん？」

「俺は、西高校。」

「そっか。俺はF高校でバスケ続ける。お前もちろんバスケ続けるんだろ？」

「俺は・・・。もち！やるに決まってるじゃん！」

「じゃあ、お互い強くなって、いつか、戦おうぜ！」

「おう！」

拓磨、ごめん。俺にはバスケ続ける資格なんかねーみたいだ。

根性なし。

俺の中学校は部活動が盛んな学校だった。特にバスケット部は全国大会までいった強豪校だった。

しかし、最後の夏。

関東大会、三位。

全国大会へは上位二位までが行くコトができる。おれらは準決勝で負けてしまい、全国への切符を逃した。

まあ、相手が全国常連さんだったししょうがないのかもしれない。けど、試合の結果は91－93。

1シュートの差。厳しいものだ。あん時俺が・・・いやっ！もう、思い出したくない！バスケットは諦めたんだ。

諦めたんだ・・・「拓磨。お前になんて言うだろな？」

「・・・さあな。」

そっけなく返す。

「まあ、お前にもお前の事情があるんだよな。」

そんなんあるわけねーじゃん！ただ・・・

「なあ、拳梧。」

「ああ？」

「お前、中学最後の大会覚えてるか？」

「おう。今もあの時の光景が鮮明に浮かんでくるぜ。でも、あの試合正直楽しかった。」

「俺も、楽しかった。あんなバスケットをもう一回やってみたいって今も思ってる。」

「じゃあ、なんでやんねんだよ！」

「恐いんだよ。バスケットが。」

「バスケットのドコがこえんだよ？」

「一秒一秒無駄にできないあの緊張感の中、プレーなんかできねーよ。あんなミスもう二度と犯したくない。」

「根性なし。」

ボコッ！拳梧が俺のほっぺをおもいきり殴った。

拳梧はむなぐらを掴みこう言った。

「テメエー、ふざけんよ！いいか、確かにあの試合はお前のミスで負けた。テメエーの責任で負けたんだ。テメエーがそんな中途半端な気持ちでプレーしてたから負けたんだ！でもよー、悔しくねーか？もうそんなミス犯したくないから練習して強くなんだろ？上手くなんだろ？テメエーはただ綺麗事抜かしてバスケから逃げてるだけじゃねーか！ホントはバスケやりてんだろ？素直になれよ！馬鹿野郎。」

そう言って、帰っていった。

拳梧、拓磨、ホントにごめん。俺には無理だよ。

新たなる始まり

今日は土曜日。

俺は何もするコトがなく、家で寝ていた。

「昨日の拳梧の一発痛かったな！。」

パラパラン。メールだ。

宛先

「拓磨」

拓磨からだ。

内容

「今ひま？」

「うん。」

送信。

パラパラン。

はやッ！

宛先

「拓磨」

内容

「じゃあ、うち来て遊ぼうぜ！」

「わかった。」

拓磨にあわせる顔がない。しかし、行くしかないか。

拓磨の家へ着くと、拓磨が窓から顔を覗かせ

「おう！入ってこいよ！」

ガチャッ

「おじゃましまーす。」

「おう。元気にしてたか？」

「当たり前だ！」

拓磨、ごめん。

「わりいーな。急によ。」

「全然、俺も暇だったから。」

「実はさあ、お前に受け取ってほしいものがあるんだ。」

「なんだよ？」

「これ。」

と拓磨が出したのはバツシュ。

「これ、お前が一番大事にしてたヤツじゃん！」

「ああ、お前に持ってももらいたくてよ。」

言わなくちゃ。勇気が出ない。俺はホントに根性なしだ。

「受け取ってくれるよな？」

「・・・。」

「ん？どした？」

言わなくちゃ。

「拓磨。」

「ん？なんだよ？真面目な顔して。」

「ごめん。俺、実はバスケやってねんだ！やっぱバスケできねーよ！だから、これは受け取れねー。」

「はあー。やっぱりな。」

「・・・？」

「拳梧から聞いたよ。拳梧に相談された。お前だったら、あいつの気持ち変えられるんじゃないかってな。」

「なんでだよ。なんでそこまで俺にバスケットをやらせたがるんだ？」

「だってさ、かずバスケット上手いじゃん！もったいねーよ！最後の夏の大会。あれは確かに悔しかった。でも、あんなん気にすんなよ。今を頑張れ！一緒にバスケット続けようぜ！」

「拓磨。。。」

「なんでだ。こいつの一言、一言が胸に突き刺さる。やりてー！バスケットやりてーよ！！」

「拓磨、お前にとって俺はなんだ？」

「へへっ。俺とお前は、ライバルであり大親友だ！」

「俺、馬鹿だった。俺バスケット続ける。」

「じゃあ、これ。」

俺は拓磨からバスケットを預かった。拳梧に申し訳ねーコトしたな。謝るべ。

「ありがとな。拓磨。」

「バーカ！バスケット、頑張ろうな。」

「おう！」

「じゃ、帰るわ！」

「いつでもこいよ！なんかあったら、なんでも言えよな！親友！」

「照れるからやめろ！」

こうして俺は拓磨の言えを出た。

拳梧に電話をした。

プルルル。

「はいよー。」

「拳梧。悪かった。俺、バスケ続けるわ。続けさせてくれ。もう逃げねーよ！絶対。どんなにつらくても、俺はバスケに、立ち向かう！」

「おう！おせんだよ！もっと早く結果出せ！バーカ！」

「わりー。確か、部活月曜から始めていいんだよね？」

「おう。月曜、一緒に行くべ！」

「わかった！じゃ、またな！」

「あいよ！」

拳梧、拓磨。俺頑張るよ！

こうして、俺のバスケットが再び幕を開けた。

もっと、もっと早く結果出せばな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2134b/>

夏の風になびかれて

2010年12月16日14時35分発行